太平記
九

太平記二年三前編　起文政□□二月　至□□□□五月

▲六丁 京のさわぎの事

[illegible]

▲七丁 やりこめ隠密の事

[illegible]

▲八丁 三上□より□□の事

[illegible]

▲九丁 帆人身をとるの事

[illegible]

▲十丁 □□□□の事

[illegible]

▲十一丁 □□□□の事

[illegible]

伊 門 舗 巻 2754 7

[illegible]

▲新田野の合戦 并 橋井の宮沈かくまのる

[illegible]

▲志田とく院の沈かるる

[illegible]

▲鳥池の川をんのる

[illegible]

▲新田左兵衛佐義興の自害のる

[illegible]

▲京いくさの事

明日神南の宮戦に山名打まかせて平沢へ行
庶ねとせめとしかば、我軍のえい山と打りかけて。
三万よりさの勢と軍し。東山に沢と北仁東
京のたま北高まハ丹後さんかの勢三千よりさ
と沒かへく。嵐山に北ろまで。京より西後も荷わ
う井。八幡に立るまでハ。京の方の沢となり。東やま
西山やま後。西のとりハ。皆鳥軍方の沢となる。
中にそこわしゆる。神社仏かくハ。住所のいそ
の内にもかちたる。山林らく本ハ。さきぐ矢倉の
粉に切てさる。京中とハ款うこ宮にかうるとれ。
見遣す様になをとして。東山より東て。目く軽
くに焼けしに。白川とハ款と西京にとるさをて。
人ちに乱と尽さをとして。東ちこうりとして
焼けしに僧にのこる。行苑せう座。さて円程二百
九さうゝの宿ゆく。ミな門戸をとぢて。人も
なかれハ胸子の極と成りて。ぞいきよく樋と
おかへりさる程に二月八日細川相模の守清氏

[illegible]

の井と名乗るとぞ申すとぞ聞えける。[illegible]

[illegible]

ひしぶし時二の矢氣の大明神の仰おまて今夜
東都の合戦ハ仁木細川のんこと思ふ程なく
ハ其地の井とんなまて細で物質と結下
見りし仰りやしさハ今生ふてハなかく弓矢
のんと失ひ後生ふてハ其ちの業とうくべし
と一紙の起請を書て氣なの程ふとしてはひ
しが果して討死仕りなるふとそしやなれハ
其ゆるを見ようをてこれふふぞふも神の面
の頃人二の矢を庫の内かゞ〇と戦場ふさし。
んと表代まうぶしとそ出さりなり若のさね聖
ハ鎧んひぎと深て鎧ふわひ今の二のこや公家
と知て敵とすつ時代へぞ面とひへ其そのん
ざしわなまじ鎧をうの者なるとおまぬ人
よそなりなれ二月十六日の朝ハ東山の勢ども
上京へ打入て合戦と見よしゆしなれハ醜らくな
さんとて若りし合戦の大備尾張左馬の仕
面ふさふて東ちとうふ一条二条のうちを
もふ如て打まりなれとして細川さうこの
清氏ぞ東黒田勝安七百ようさふてひがしふ

ようとりなり尾張左馬のすきを後陣ふ
寄下肥の馬がゆ手綱ふ出て遅りなると追攻
て討んと六条河原より京中へかきへ入り
かしと務ふすると東ひしふ立るとして
づふ鎧と行急さう細川黒田ゆ大勢を
てわなつりかくしとや思ひなんわひ
ふ如てゆると一見ふさうとうきすへて同者ふ時
とどろと化ゆ行急すうしと撤退を手大勢の
中へかきへて弓鎧と出て切わふ左馬の仕れ
として行急うさすなつぎとして三百ようさふて
見て返し六条東の洞院と東へ鷹丸と西へ
追ひ返しつゞ八度までぞりし合たり細川家ご
とふ追ふらく待ふとしなりふ南方ちはと
てせふ捕ふさうと云ふなるが呂へき路とぞまつ
く戦ひ返し合てハ切て落し八方とまつりて
戦ひなるふ左馬のすきの六丸のじつふ如て
見しさりなるが左馬のすきの云の中ふ六村首
夜左馬後夜りんの所西陣の金案場とそ
つゞやうる勇士の待わり二事ふさうと同ぐいをし

てあつかくまんとおもひ。あ朝ぶり同ふして
うちくとおもひ。のくのくのくうないで網切て
太刀の金の程こそんとて。みんな太刀の太刀と持
てひらいくぞこそ討ふ志ふとこそ。金案場すさ
るなく清と無よもそむすと組みこ。南アりと
より太刀なまいは金案とおそはふさしとこれ
ま。人のぞてまおまでいさみ叶ひす。太刀の寸の
びこれ。ぞりとぞふして挽切ゆとしたれす。只
とし教さんとや思ひなん。第地の後ふとし。南
てえのやくと押なるふ。既ふ案ふるる。ふり
のふどうど係とられバ。ゑ南アが引変のちふ
みるなが。二人引くんで刈ふり。ゆえの言葉なて
絶ふ南アとおそぐれバ。金案南アが首とさる
て。切ぞんふ。当ひて。能くる。案ふて。宝ハ。ゆりて。
敷川方あひけふ。東白河へぞ。ゆりふなる。又同白
の晩なのふ。仁木右京のたまりしも。大波大猪のた
夫れ原。そ汾こよるさふ。ぞそうの原へしも。
桃の井橋ヶ。ゆる直ぐ。わり松陽正が郷氏のり。
京ぶちやが汾。こよるさと。宮てがつる前と

[illegible]

[illegible]

かくて[illegible]の[illegible]されば[illegible]
ん[illegible]とて[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
すもとる[illegible]の[illegible]の[illegible]とてんと[illegible]
つ[illegible]の[illegible]て。[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]て[illegible]して[illegible]
[illegible]そ[illegible]を[illegible]の[illegible]
[illegible]とすわられて[illegible]と[illegible]
[illegible]て[illegible]とられ[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]して[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
て[illegible]を[illegible]
[illegible]三人[illegible]
[illegible]
の[illegible]
[illegible]
その[illegible]
[illegible]て入[illegible]

[illegible]のて[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]の[illegible]すそ[illegible]
[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]
[illegible]そて[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]れて[illegible]

とあまて。さてはいはゞ高麗のすを取とたゞすて。
軍ともとうりんるは。向後とうまうじうりうり
とて。高山ゆうくゆの勢は。弱ふむらをおとの
が高くへりをかり。山陰西海のたちは。無まやをと
てとらて行。國ことに征討の法。つきんの神は士
軍ゆわりといへれ。唯雄は大将ふうりのなり。
されば周の武王は東王と能て殷の世をうこゆ
を滅のうち程は美吉をとらこそ秦の西を
わらやをし事。高紀の戦する事ゆこれ
をしらさんとこそこれ何人ぞやをしてみと
をめんに。天わふゆうす事わらんやりしめ世和
朝の抑義が。天ぢく春旦の儀を行てこゝ家
軍ふ方。うつすを為こしし。眉をひそめて
ましとぞ。ふとりりるりとは。さこそ
おりひたゝれ。高をとらくわをの日高
の門ふらず
とふくふ。れてそ。ふるいしこうと
れちうりして。又をちふなり
ふうさうしゝやうさ。ふんとれせるよ

むりしもさりし人とおそさけ
うりやしやのうちのやうしそ
りの井どのはおふこそとすれ
▲三上皇よりし。雅より所おの事
是行右高麗のすを。西海尾張の志ゆりの堂舎
つ。ふ名いつのち。時氏りの井。攝戸のち。西ふ
此下の友軍を。度流こくりをめ上そ。高ち
神南郡の宮殿ふ。折まきをしうばこる色の
あくへ。ふをもてるとは。高麗と。とまとん事とは
うる。そふくふ。海中は。今都禮の神ふて。繁をう
ぬむり。程を。高ふする人はなられたをあはるを
志づまりぞ。やこをふるひ。粮をつまこと。緣なし。
まるふ。持的流の。本流新流志ゆしやうあるは。
とゝしの。まる。南方へとゝ。ふ。ふ。ふ。
名生のおくふとしこあれ。おりをしうばこても
朝ふは。いぐらの。えすぐふ。出經ふつくを。ひ
上は。山中の。出經のあまりふ。出廟りしれ。
延文二年の二月ふ。皆あるうの。山中よりおし
をて。朝へ。是を。れるしをるよ。皆は。朝の。

みのたゞの王侯に法すまたハ子侯にして。其一にも
なびかしかやうのことわりとおぼし召知を給ひ
てうさと係多に於ひてうさと給ひめるせられハ此
身をかつさのこゝろにしたがひ此人をみちづかにて軍
るの雲一洞の月。禄銀の此郷に放ふれハ中く
此人やすくこゝろをとらひかる

▲仇人身をなぐるなり

かくて軍のやうと見聞ふ。天下この兵余に此会
礼に拝ふ事ハせんとう。行乳樽屑と焼くして。こ
ゝ以上法司百官の高ふ人おかく焼かつゝて
とハはづかに十が二三残りたりしと又と友れ東
ち宮戦の時地とかくつく。東志ふ川に武士
のやうこの外ハ東家のこゝろにてこゝ難こゝろ
東上の東田にこゝろ白骨。東ひしにまとかれ
て。ゑし敵の詞とも見しに我ふなれハ其首捉
りんのそ族なまかんを見ふ。上らう女房こゝろに
いろまでわるひハ左弁ふし川の流のそこのこ
ゝづとなる人もわりわるひハ左手ふとらして。
田夫野人のいやしいたゝに身をとりをわるひハ

田宮に立悪ひて。葉の行のとがそに頃ひ給
へハ私の衣をすふしてわるつきの親法しくおさ
もの煙をして流ふ陽に見する人おかし中にも
衣まにかなししハわる法衣の上に面に云アの
お捕なかしとかやひのかる若日法ハとこさうで。
楽に身にわまりかるが此乳の後姉妹ハこゝみ
知らしされ法親なんぞくハいづちなくとら
失てこゝ七身にかるる女子のふるる男子に年
法わひるれし女房とこ人がりぞ身にそひ
ふ。敵の内にハ身と重なるさ。秀のゆうりなく
てな後に神とひろぎん事と流石なれバ思ひ
ふて女房ハ娘の子とハ夫ハ子の子と聞ふ
くく母殿の方へぞ落行なる。誰と教子とし
りなくいづくへ落つくべきそ見えしねバ。ロ六町内
てハ。此東の家に神とうしさて法わし。一わし
わゆんぐハ木の下東にひまかしく法くる法
ゆらとこゝろんりして。十日ばかりに母殿のくに。
ねがらの宮やの家に流まこゝろ思ひお川とりに
不ふ行いたりぬ。敵と出しとうりたるに落ちる栗

挿なんどと指ふて僧ふ所をつぎしかハ男を
わまりふまゝ所わしとてずねとて母おさうな
き老皆川のひとふことれ所てのうりれバ其わ
まりふ見急てどわる家のさりめざさ人の面こ
見しこう内へ行く中つのあふてゞんて疲ごひ
とぞ志うりなるまつくるて内より行中ゐ十
よ人見つあく男の家甲なまばうくる人
のつまを見するハ程付法師のわんなへ見る老
死志りずハ家男の旦文りちてまつる人ふて
ぞうりん林ふめ動てがうりんをしてまとり
足とく折行りわぎつとうりつ二時ばりぞ責
うりなる母屋とさなき老がる半とハ思ひよ
らず門のひとふつれ所ていまやくと待のうり
なるあふ所と座る人行やすしひてあなあられ
や家家の人と見しき人の食中ばりなり
つるが疲しうとおやしき老かとてわれなる
家ふとしてあまつとなつ責つるがうへをあ
殺してぞうとらんと中なると望てばめつう
とさなきりの字を誰ふまとひれ誰と見

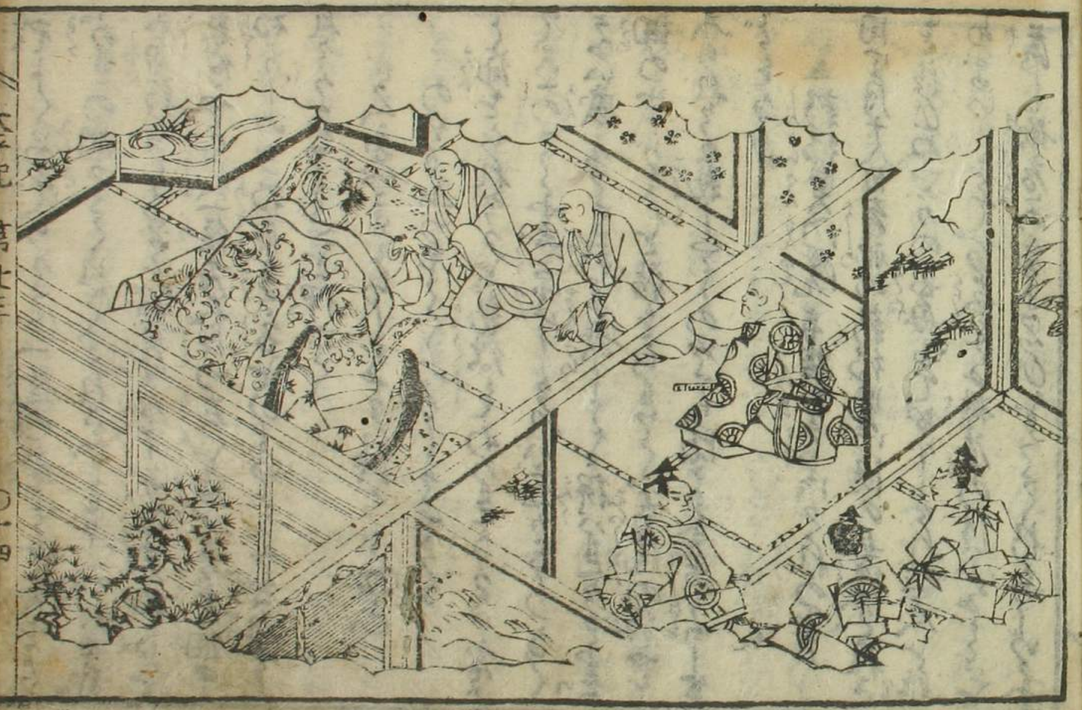
とてか驚くの聲をもたするべき流れて殺
バ早逢の様ふひとりまくよりんもうるべし驚
く行くことをなつ浴ひとおりくふ流るなしん
で母と二人の母さなき老ぞひふまふまとれ
くと思ひて河の深き側ふ身を投るれ
まるれ音のお情ハいろふ責とひなれども
りの事より料なれバ落ぎりなるぞ
ゆるとして先されぬ見ふとこりすまあるの
処うるが出しさふ又とわるまゝ行て菜
なんどと見わつめてぎさの河ばさへ行てうるに
母おさなき老ぞがあるおまうぢ杖なんど
ふて今人ひなしおいひふ如ぬる半をやしぬ
して強ぎてうまさこなきめわりく程よ後
ありすこしるなる母をさふおやしき物のさ
どこうりて見られバ母と二人の子とあふよ
とおいて流まうりうりおとて活出しめ
た男をひへりてくるをひやかり果てぞれバ
母屋と二人の子とぞさうへて又りの側よ
とび入ぞふ見しく我ふなり字ふ知るまで

我今に鎮まらんとて猿どもと人数とうちて山のさ
ところにまねきされバ手を繋ぎへいく去ぐらいす
と言へれ共とも喜びて行てさがしあおされ
とらへられにくろ拇先と手すくしぬりにつれて
かの清海ちぬ猿のさわにおつまりて田楽さうさ
く御猿きて猶子らんどに皆くれくまそてさ
やくそ終しらバ宮弥民御猿の外をうけす
るやもわくさす又付れ猿陰のうちをやもしら
すらで是と流ちすてくぢを留にすつやくら
をれ同しけ妻するそて又将毒とうて捨
びろうにておそにみ無十貫文されバ一枝の備
首にみ六の貫きまうろ人のしりそて百貫とも
ろ人かすりて己田楽さるぐ御城向のやうし
にくうり捨るなるらぞもしくけ人てき気の
果銭を集めんと拙うりきさろうて天りらも
がらりうろ溜におわくくにわすらでちる誰せ
ぶの西風とさ人とうの武百姓の淡绮とせ
やくり偏人御人のおのるとおもつかくるるの
すくりばの色人とかし人ハ経済をとれをし

揚貝ともと也ひく殿あさすく一家ともにまはる禁
さしに万事の御清をきうしとをひて御人事れバ
酒えん来事の当つらんと思ひてにに面にみなげすべくの
輪まきともと去しく御舞うとも乞ろうに氏も附にわ
そぞ猶ひるうれ。お代書院の気うずまにあらうり
し猶に延文三年二月十二日御たき清の中に出
毒でうち思ひうしもしも何手しわくの武臣さ
ましうれ清三億の猶しやうと若の下するまさ
難中ぞ猶ひるう清将。私書の腹つくの宮をき
の室下ぞその御うわしてそぞ人をなりしわかれなる

▲将軍御もとの事

同きの四月女房達の暁くのとるみうに麻疹といふく
んら悩うすらびおりしきれバ本の御料の四し猶を
召しておらつまりんぞりてたうう華佗が術と
画して去るに一の事やとうらうしもすれ共さに
雅すり清陽のぞこてる猶の気る悩わずまうも。
元見さいさん若君里と使のる御心やくしれ十二
将軍の清る深まう。うまかんしもぶぞか寝る
数延年の御猶との御移をとめとも病見

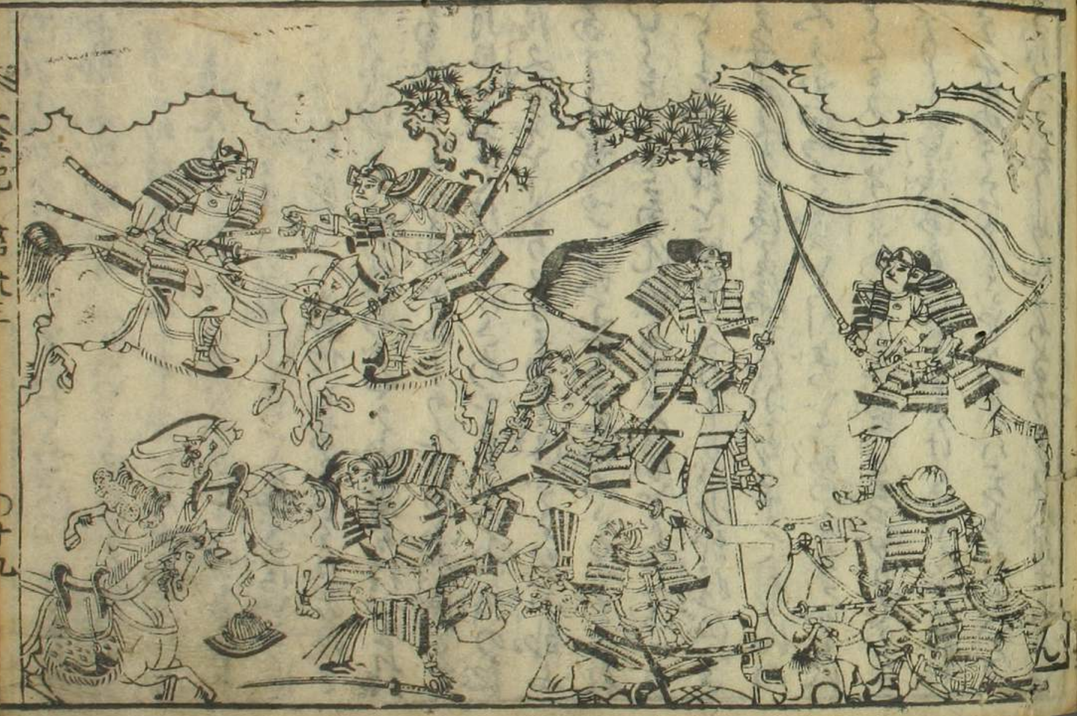


▲菊池かつせんの事

中務大輔ハ菊池に九国を打まかせられしかバ、誓願に志てかならず安からしめんとおもひける所に、細川い
よのちの下向を待ていたりしを、ふんと金子浮
ふの者もみな浪人の兵大宰府をうばはれて気をわしく
しねを申しけれバ、かたを事ひて気をとりわしく
まんから木ふ菊池浪人のうちいくさのまさるうや
正平十八年かれで様にもらるゝ六十の城を責
んとて菊池ひぞの者も兵共みなうちきて十一月
十七日ひぞの国をたちて日向の国へぞ向ひける。
浪人の兵共より日向をきりしたがへ打もやさ
これきんそふ浪人の郡ふゆくぞしたまふ
新太宰さらにうけ僧侶をよ無して豊後の豊
中小あまりて松をろくはとまるかた見しれてよ
さ肥前から日の光をうれバ菊池と日向の国主
やりとして浅く大越前の中に甲州をとあけ
て豊後の国の城をのうちつのごとく大和
の肥前ハ門とあふてあまのかたをとゝのへ
ちん前をゆふハ一らと浅ふわて筑後の城を
あさくく菊池すでに菊池の肥後をめあまれたる
られて寄の小屋をつきつゝ菊の中の吾細川の
国をもしと討まねんとならるゝ菊池
甘井のひろう範住のやらの者たち軍を揃
の将と勢ふすきて馳中ちすてさらくとりて
くらうまた浪人の勢ハゆくると五万とふささ
らくしたしてれ大友の中事をとりて十一月十日よ
り大宰しで肥前の国の肥ふ浪人のうちに民家の
中あふ城りて三隈の城と高松をもうで
しめとらして後とうつ事ふ三百人ふさとふう。
肥前のみのおの切ふる三隈の城を落されてか
あけしやらひをんつの城ふつとまちまちて
浮田の奥へ西にかりられバ菊池それをきさまでて
そびのまへ門延すふ浪をかう深し大将に
上小弥たりれハ兵の一とをも射すそのれが
鉄づらもりるられまでハいまだこそ家のか
の弐の大宰府前司菊池とよむく追ふかな
らてくれバ大友に捕しわれて菊池の中よ
さうら卒して大友とちあふきんてわくちの浪

[illegible]

[illegible]



面の大船りくの井戸家の竜江田毋後のもの。ふ名
いなづのも城口ニ入れ里見十郎侍大将ニ入。菊池
ひごのも我先ニ見ひごの江ハ入れ、しいの袖家の
江ハ我侍。日縁ニ入れ我時。わう星りんの助武
つゝ城の都ものもの。警庭ニ入れ里の大脇ニ入れ
ニ河も庭の西北のもの。西寄の江ハ入れ、ひしさ
のもの。もちまた江田ゆかれ和りしさの横のもの長林
ニ田ニ西ニの竜ニつの交刑ニの東ニ入れ刑
ニの西ニ白ニ河の入れ。ゆ波刑ニの西ニ大
村源正もうひつ大宗の横の小武ニつの交いさ
のもの大胆或ニ大脇ニ入れ、ゆ海
口毋後のもの半ゝて都ものの横のもの。ゆ。
河のべ江ハいなさ浜ニの大夫若ニ大きものすけ。
志ぶやニ河のもの同志ありの竜。鳴づかつさ江ハ。
無和ひやうごの助ニ入れ、武ニの八面ニ任義様ほ
のもの。猶振りまのもの大将ニ入れ、会田ちくぜんの
もの。そらと云流の会しとしてよう努つゝ八ま
ちさ。ゆ。ゆ。ゆ。坂ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
とゞれ。ゆ。ゆ。同七月十九日小菊池ハさうづ。

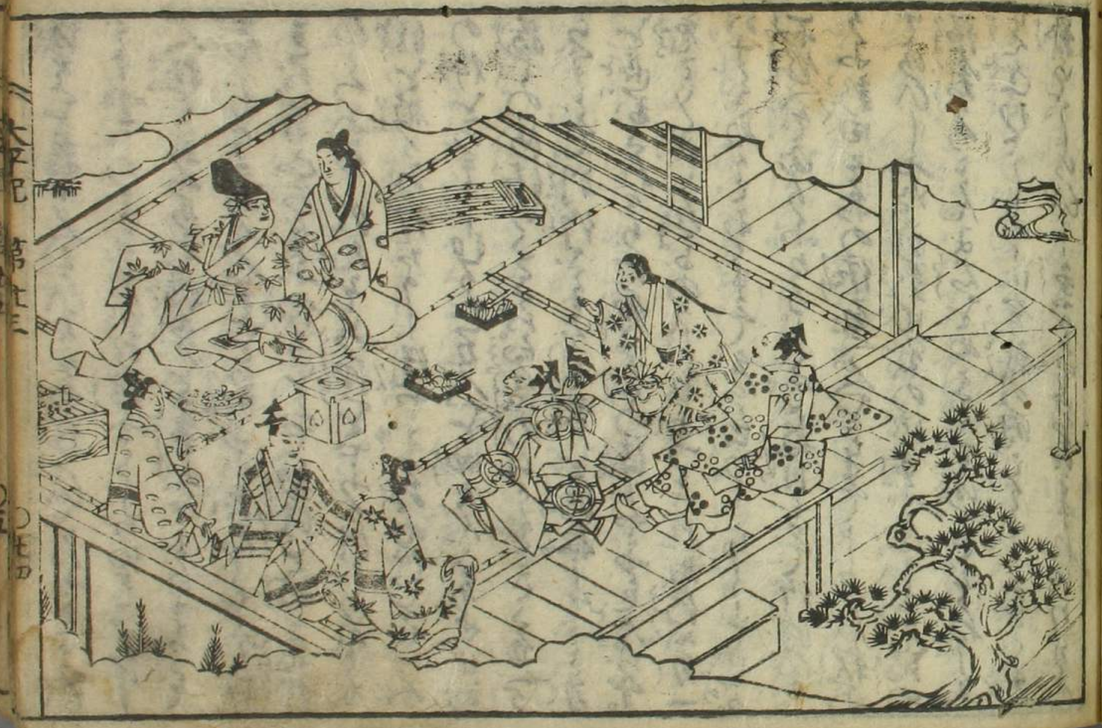
▲新田左兵衛佐義興朝臣誅伐の事

去ぬる応安元年の春の頃、武蔵野の辺に、俄に物騒がしき事ありけり。其の故は、新田左中将義宗朝臣、武蔵守に成りて、国務を執行せんが為に、下向すべしと聞えしかば、其の勢を付けんが為に、一族・譜代の者共、我も我もと馳せ集まりければ、程なく五百余騎に成りにけり。此の人々は、皆、元弘・建武の合戦の時、名を揚げ、忠を顕はしたる人々の子孫なれば、何れも皆、一騎当千の兵どもにてぞ有りける。

ぞ聞えける。

▲新田左兵衛佐義興朝臣誅伐の事

去ぬる応安元年の春の頃、武蔵野の辺に、俄に物騒がしき事ありけり。其の故は、新田左中将義宗朝臣、武蔵守に成りて、国務を執行せんが為に、下向すべしと聞えしかば、其の勢を付けんが為に、一族・譜代の者共、我も我もと馳せ集まりければ、程なく五百余騎に成りにけり。此の人々は、皆、元弘・建武の合戦の時、名を揚げ、忠を顕はしたる人々の子孫なれば、何れも皆、一騎当千の兵どもにてぞ有りける。



よおあまりてでとえしろう。扨こけるいくでんべ
こ。當ふえざうろ松そころおうんーみてこり
ろうぐあろ私のそうふ行法右衛門のやのり奥
ろて此辺ハえそひそ一枚をとぢろくしろぐまあこと
のまお居してたあうーしぐ
そこ高松とそれーとそころうくろ
仰りてこんずるうハけもうふうろくろ
らずいろうろ通ととめぐてーて私もさ海
てなそうの政女のえをまよ入ぢくまかろ
しくらもふうろーとそ流られろ行ほいし
ようの私ふぐくみてくんのあざろうと能ず。
いろそてきとやくてまをろぐさまの伝文
の私ひとさんーておそうぐさいうんうあお葉
うざくこ初注ろんずる事とあ事ひそ
とうひう面とまうろあ
海ろうそ淡山ふみろ
れろうくそうろ
すろうまれい行法

よをそしりそれがいへりけるあひだに。
ねんごろにいひてとしごろおはしつるかひもなくて。
ほたるのおほきさなるほどにてとびあがりたるを。
ひとのそこにおはしけるにやとおもふにあかくてともしたるやうなるをみて。
とりてをさなきものどもにみせたれば。
門のほどをほたるのとびちがひたるにぞ。
のぼらせてつくらせたりけるやうにぞ。
ようの金をおほくいれてつかはしてぞ。
とどめつるかひもなくてかぐやひめのいできぬるをかなしがりてなげきふせるをきゝつけて。
とりてをさなきものどもにみせたれば。
ふかきやまのつゞらをとりきたりて。
かぐやひめのいはせたまふことなればとて。
かぐやひめのもとにもちてまいりたれば。
かぐやひめのたまへるやうにて。
ふかきやまのつゞらをとりきたりて。
かぐやひめのいはせたまふことなればとて。
かぐやひめのもとにもちてまいりたれば。
かぐやひめのたまへるやうにて。
ふかきやまのつゞらをとりきたりて。
かぐやひめのいはせたまふことなればとて。
かぐやひめのもとにもちてまいりたれば。
かぐやひめのたまへるやうにて。

と責ととして、義貞へ参ぜられしうへは、生ながらいけどられ
えいらんとて、後ふ武ゆうの誉用さりがりも
無ひらがふ物とおこすべきこりの由とて、さらぬ
僅ばかりの兵をひしとおあてゝ元服させられて、新
田左兵衛の佐義興と云ぞめされるべきこりやう
人ふすぐまでこうりことゝ切ふ。ふいわくまずでりや
りしかば、四年七月のむさしの合戦ゆ来、古今
の軍ふもたぐひとやぶり、万年ふあらん事さて二
いまだかゝるためしなかりしぞ後分とぞ思ひける。
二人むさしの上野のうちふかくれ引籠ひし時、うの
国の清さうがう三百よきこふてゐたりしかども
討えず。さふるまひあらんとて、天とりをり地と
くだる術ありとあやしきこゝろの曇者なり
しかば、猶念のさまのうきふをもって事新のさい
しやう申わけをさりつるふ
うんめいきはまりて、猶義貞よりくの恵をも
こばかれ、ふとをれてこられ給ふがりしかど
ふ。江戸・竹塚ぶ忠功ぶつくんんとして、別敷ふれ
の恩賞とぞ約れられるぶ、ありまこう矢のかん

わらはまとそもとしてやむしんをもありぶ文ときこゆふ
男のふるまひうまと凡りごときとすう人もあり。
竹塚とぶ称をむかんも同の恵をぞ蒙給はさ
ぶらふべしとて、出羽ふとそ出羽ぶぞ下れなる。江戸二人共
いまさらぶて恩賞の地へぞ下れなる。江戸を
江のもと義貞のまゝとのしらいく別当殿の地へ
下向しまをう。十月廿五日のくれ程ふ矢口の渡
ゆふとりのぞ。ぶくらの舟と待ぬるふ。舟
の仕度を渡しなし時、江戸ぶかうらへとゐて
のきとぬいて舟とまづめくらし渡しまをう。江
戸ぶ恩しやう待りてうらし空ぞ志ぬぐの渡
さうゆと思ふてぶりのの舟とぞこさおい
なぶ。此舟すぞふ江田とうろう時ふかふふ天をさ
くりていうづらるりあ風くまをしく吹こまぎ
ゆそ。田なまを舟とこそふはす渡しちあわてさ
わひぞこさぶりぐうんとぶろとして舟とうをと
なうぶ。さうまく渡ふ折うへされてあるぶん
どり一人をのこしぞこゆふ志ぶぐうり。
其のいうりさぞ事ふわしぞ。其ハいうさ渡うし

眞のとんまやうなりと。江戸たま江のちとら
おのくさそ。いけくさより川へ。しかのちやとこそ
まくこさめとて。是より先に町わるよの漂へると
りやめて折ゆる程に。いなびかりの行さ紀にひゝめい
ていかづちたにまりいくめく。其家は是し。只
くまぬさ。ぐ。雷神にくらくしられぬと思ひ
されば。此ゝ手をはへ。三湯のすをとぐ。を宮せ
ちくうと。あして。血てりゆるがどわるひのふ
りくなる辻堂を。目にかゝりて。おままでとるを
あとりゆるゝ。おゝるふくをつむ。江戸がかうべの
よつにとらさがりて。雷てんこゝの。色にあるりひ
らめきゆるゝ。おまりのとそろしさ。に。後とさ
つとかりこゝれば。新田たま和のすをよし。直男
とぐしのうろひにぐつがしのみまいかぶの。
をしめて。白くりをするゝのひさいに角の生
ゆるに。葉。おひのむちとしてくおて。江戸とと
ゆんでのうのにすしおぶこのりなにとらさがりて。
まさうせすがりなるかりまことをりてがいる。
より乳のもへをすぶつと。祇とをさうとしる

て。江戸るよりさうさまにとらさりゆるが。乳
て血とらきりんとつひやく地しうとどしに
のをて。江戸が門へかさつをゆるがぜるがゆるあし
もとわがさがふにとおれゆるまゝとしてわ
こえぐやそこ。子もとよしぎをびおにおり
ゆりがゆるせしやうの世のなひ。明りとなる
ぬ。乳のうちに。僅のうくにふゆりなさけなま
るまをとくぐおしぶるまひ。半月とつぐそ
ず。国果まさをんうちまちに。身につきわる
るぞ。又こゝしい。永劫のぐやうなりの家
に。けれて。箕さうとつきぐら矢をれ。世伝
の。後なれば。力なしゆめくんりやうの思ひの
知なりるをこのこゝろまをするべし。ぐみも
あまの。和の。家にぐさまをひたまへ。こうねのこ
こまひゆるゝは。黒色のよつにたこと。折て。時をつく
あこしゆるゝ。なに。老の。男。まるやうんとあ
やしくて。着する。男とれうに。見やりこるに。新
田たま湯の。作よし。眞でこけ。二丈がりるゆるゝ。
るつく。半ばめづあるゝらをつ。大十よ人。お後に

[illegible]

太平記二十三終

大平記巻第二十四目録

[illegible]

[illegible]

九丁

▲紀行つくりんひいくさのる

[illegible]

十丁

▲三度きの西軍のる 付 住吉くすのきれるる

[illegible]

十八丁

▲[illegible]がぐちを軍のる 付 さうがをいえいれる

[illegible]

十九丁

▲[illegible]ちるいくさのる

[illegible]

廿丁

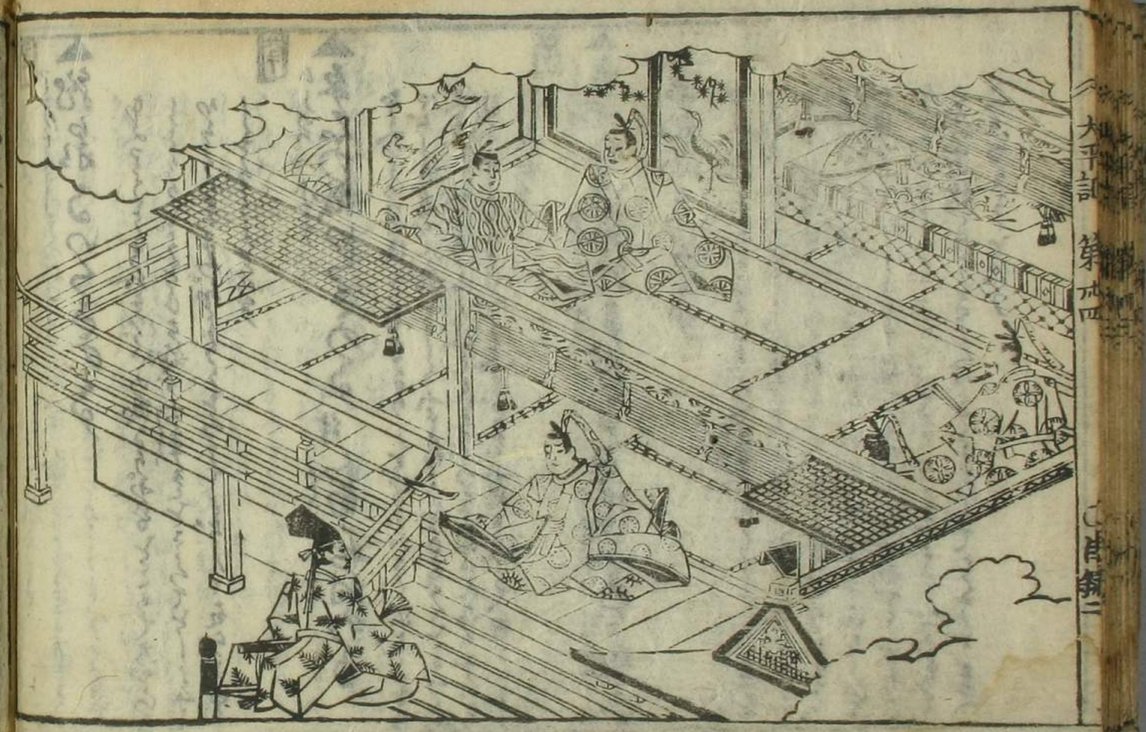
▲平石の城いくさのる 付 和田和討のる

[illegible]

廿四丁

▲吉野の西廟神夫のる 付 諸国のぐんぞい

[illegible]



太平記巻第三十四

▲宗和中将殿小将軍の宣旨を給事

極念頃者大臣高氏公無比の御ひ別せのあ
やぶむる。深淵にのぞんで薄氷をふむがごとく
にしく。天下今に反復しぬと見えしかの処に。そ
ぞ成ことに武家のとうつやうたゆめべ身家
男と見えし。新田兵衛の才を兼眞ハ武元の
無にく討ぬ。去ほまで流つ一れ無と討ぬく
さりし。菊池ひごのち武光も。小武大体がひな
ぐつて敵に敗しのちれいきわひすくなくなり
ぬと申せしかば。天方の人ハ月とのぞむにれ。
わかつきの中にあへ無がぶとくおらまかまさ天
にかなしきあつく。さらにかなかぬせのうさを歌
ひまれば。将軍方の武士たちへ本をこわしく
去のおもとうがたくおやうき中にも行と
おわくして。今ハなにかるうるへきとうろこば
ぬんをなりもとりぞうわどに延文三九十二
月十八日宗和中将よしのつを勅臣二十九歳よ
て征夷将軍になり給ふ。日野左中弁とさうろ

つてうわつく。京都にハ十一月廿八日の午のこくと
申さしらべ、按察使実世卿、白川でうんくと始としつ、
弓矢取衆の事ハ上下四の矢がつよりわりさ
ひまでさしさをおつぎをつゞ馬なこゑしべたた
袖の涙に紅の袖となす。ぶしをゆのしさがれず。
天下久しく武家の一統して安堵ふわうる世
さぐもが愛とされと出立さまゞでる袖のぐれなれ
太刀かたな金銀とのべ、まうらをかざりけとこゝ
す。中ふを河ごし強をせうのつれわまりふ風情
とこのんで行るこ十五日錦もてひきをうつのこ
きむしされうすくまゑ井ようざ。あらこ鎧文
いろく小袖の色とそめて。こゝとゝ。ゆり八人より
きらり。其郎の大名共一勢くり出ておるひ日
毛のゆろひ黒てゑ百きゑ縁ふをわりおるひハ
四人ゑ天の白太刀小虎のうりのきりざやりしめ一
掃ふこ振りさそくゝ。百さこ百さ井をわりさで
りうしやこゝくんがこゑりあ。こゝ。かとさまの紫と
そいて。表申衆が愛とわざひきしをゝくやと
おほして目をわやれり

▲和田荷いくさ俳定のる付給ハ分数のる
はじめ吉野の新帝ハ河内のあま野といふ所と
皇居にて出発なされバ千すのさなるの政正
儀和田いづこの事にさきを二人あま野居に来ト
てそうりんしまうれ。畠山入こうなきい。来ハう
こくの勢と乗して廿万ぎすでに事都に来
ていなり。山陽ハいらりまとうぎり。山陰ハいらん
ぶとさうひ東海東山南海わくろくろのつかも
の数とつくして上海仕ハなまバ。敵の勢ハ定て
うんのぶらくにぞいらん。但かいをんにとらく
ハ俳定くうたこのうとてそまうれん仕くいへを
ゆへハいくさにこのいろもことはべし。いまゆり天の
時地の利人の和にくいし内ことにふ時ハ勢を
といふことをうるとゆずとこそかんしていへまづ
天の時に付てかんがへいへハ明日よりハ大将軍ゆよ
あつくびがしよりハこひふさがりたり。畠山名
ハ後東西と言てまうり上にくいこれすぐに
天の時にさうがハまいりずや。沢に地の利に付て
来ずいふ。こゝの得うしろハ海山にしてまく。

数のん内とまつてず。あれに大河をかけてよづかなり
橋一河とはとまりさいへハ元弘のちりやの軍ハ
中くやにとよがず。こゝ後東氏のこゝれよりこの
うこ。細川若刀同じつのち影氏。山名俳定のち時氏
うこの義氏のちりろなふ同えちごのちりろやす。
との畠山みざうん種をにいくうまでずでに云ケ
変はれへ来て。橋勢とうるひたうひと挑しか。
敵のいくさつのに利わらいわるひハうが○と河南
のちらにさうしおるひハ名と敵ハのちんに生ひる
こゝ是南山形橋の地ようがいのこよりと得ろ
ゆへにくいハ。沢に人の和に付て思事とかぐし
いふ。こんど畠山が上海ハ。こゝ勢と公義にかて。
お美とさうしにむさがらんとゆずしまてハ
なかに来ずそ川の一ぞくたもうれが橋ゆとそ
神こゝ古波さくまが一郡を。まゝ美と神さまりね
半やいへさこゝ是の人の心の和をねところまてハ
ずや。天地人のこ連こうながらくがひいりぐこと
ひ敵百万のせいとありとてハこゝもどそうくに
こゝぬ和にくいハ。但今の皇居ハあまりに。あこ後

なるあまでは人ぐらんがうこのあくぐらんしんと
中はあへ出産とうつしゆいらをはくゆさのり
まさうけあれぐつこうつちの勢とおとをすひ。
ちりやこんがうふかひさこりり。龍山石門の辺よ
りをおくゆ日こ和くふあひうひゆあさゆも
とどん地ふ石門北がくふりのつかりの其紀
伴の事の志ゆこ代ちんや中づくさ申せて龍門ひ
[illegible]神ゆ男ふらんとくと紀伴門ぐろの辺ふ
神体とおしく宮宮をせめありをいさともつぐ
をぎくうハしめぐさいめて鎧氣なるがんぐう
勢其なぐろ辺居をでいべき。辺居して行うへす
りのすくぐつふのつりをひけ。鎧とふ里のあふ
退らくし。出うんと一時ふひくくべし。これ産業
するあのうつをんなりと。事をなぎふぞ中ける。
まさとうじめまいしをて。どうの月中ゆあふい
ころまでこなるのりしさ事ふぞ思ひるぎさ
バやぞくらんしんちへ皇居をうつし後ひすべし
とてさんかうなるふ。せ異なしんへとぞくろ
ゆりしがきせ方ふべしすしとゆきうあぐふも

とそ伴蔵のよろあこ人ぞ釣の織る一夜ぞ後
拾遺二人清身の友ぞ人ぐりとなぐをられしあ
ハいちくとしけくとち出ひて出てさ長夜の時
と行べしと御おされまぐ拾遺雲白太政大臣だ
右の大しやうぞ大中納言七年八史ふ位六位後の
[illegible]婦人まさよ[illegible]門伴[illegible]よらう女ぐうお
世原なふいてうまでおうひハそ飛鳥門天のうハ
ふし地十津門の方ふとら釣くおさまりしげな
ふ山うつれふ。さ男とよ千ろくもありおるひハ
志賀のふるさとあれのこやこ京ちくにはよ
えり。歌ちんのゆふまされぬくぐましぬとけ
すくもあり。詩者西園とんうくあれし。此事の金
[illegible]さしよ思ひしうこしそありきるれ
▲新物宮事由方を鎧の事付軍勢らうぞこさあ
す程ふ是利新紀の大物宮事詳あそん。延文三年十
二月廿三ろ船とこそ事方のよまへ向ひうふ。お詩ふ
くこふハまづ一族細川さぐしのせ清氏今弟だ[illegible]
吏物宮同ふ此ふ同うりんの助同ふるの物補と
ひりたまつのすを。伴本右京ぞ大夫今弟[illegible]同ふる

が語の〻もんとくろしてくらんすに続くりしま
よ〻帝代の御宝をくろしめしにもとハちくとそ
また百倍をもちまさりしとゐへとどうかろり。
ふ言を弥陀の御本尊すりの人々ゆゑこれを供
しぬ帝寿曉のるすふる手すりのへ。悉ゆそこまと
とうかとそり。りろアチすでに寄とどもつく亡
き我事の般りまて未まろく候畠山今そぞ死
てりまーめ千んバ後東のあやうくさ事とを
わりぬんどのいくさハ極ゆとくるわしら
じとぞやく人を杉かかり

▲紀州龍門山いくさの事

田舎の中納言ならびに紀伊守殿の勢三千よ
きを卒して紀伊国龍門山に〇ふぢんをおて
杉ん千うりしけるれハ同じく畠山入道
ゐ積もう宮方どもりのちようしふかと大し候う
ゆくぢうくこ一揆平一揆溢湍のどもらがあべ
のつぞく杉ゆしが一萬ら逢これつづら宮らさ。
さい寺つよう〻ねへさし向らが發すなりて〻
淨ふ杉ふおしうろわ続ふらふりてに一同まて
しまきずんとのまつずんとろくふして後ゆゆる
んとすり勢ふかんとて隊ゆちやつくとうさころ
るごまこと〻らいりんさわふ文字の侍大しやう
宮のや伊勢ゐるぞつりのをりくてぞさい
たつうこはと汀志りぞさて龍門ふおんそこ
すりろがれさとさ山ふ挽馬杉流勢金使な笠つ
こまとどてずのや欲ハ汀ならぞいづくまでも
とひうけくおもれのたとそりをむうふぞれども
明らことぞ。きるのさうりあくぐ稲ふのうかハ
ぞかとさかるすありて軍のこハおまりよ
おりてぞ見てうりろうらの龍門山ふしやるぞ。
いそれうげんよろくうりてみらし千幡とめぐれ
いぞ岸ハ杉稲ふうきれバわうしも時の一聲と
そへびるのハ小家まぞりく寄ゆら陣をとこ
あそうりちの大旗麻さあぞてハおりあふてさきされバい
まをさんをかふそ坂中まあぞ盛らり一勝さい
らうすゐふするとやすりてといくさとつぶんとゆん
づえかすうらの太刀をとさろとら挟ふぐつ鬼ふなうつく
まつうろ一般そてふうつがり付くる神佐ないのよ

[illegible]

▲二度紀伊西軍のする付住者くすのき[illegible]

紀伊の西のいくさにおよみてそくぐくこれく。
[illegible]

[illegible]

[illegible]

えしがい。るとかのぢんかくやくてふひ場
ふすんでやかを客ふすかし浮ぐくありかるふ。
湯門の産司ぐりりして。うしろふ鉄をあげ
鉄釘ぢ寿ろ丸椿者し兵を持て田邑よりわ
ぐる丸宮しかれば浮ぐていかぐるべきと栗
ドまづらふて居りしかるとこそ大事の一の本戸を
うるめうりかる。龍智浮人ふ成て。首賀いかのち
が刀へ出ちりかる。さしでぐふふけさ清のとう。
名て。父ふ美を勅れ。と又龍智ふ力とこそ
ま。なぐりハすうしもどくぐらかるべき。龍門のふを
とへ打寄ちかりとひとしく。楯をもつず。矢の
一とも討ずぬさつまて喜よりかるかどよさ
りのつれのと宮とし。悪地ふ高門ぎ志ゆわ
さ。田邑の弟高。ふもと判友半時をさらへず。
龍門のぢんを浮されくおぎ河の城へぞこも
つまかる。首賀二友めのいくさふ。丸友のうちを
ぞすしぎかる。今いこれまでなり。一功なすとハ
とて。紀州の討手伴賀のち。つかなくはぐふの
ぢんへ帰られバ。父の種の脱落して。石橋の大

おまふかるハあしどそ中もく。男女の中納言
うとしふ龍門ふのいくさふおまけしおぎ河へとちぬ
と宮しもとまバ。吉野の志也しつうとりじめまい
ちきてまうがんふ船人しなる風ぐ也こ家ふ
とうしなひさうもとしぬふ。ふかふ又住吉
の神主。津守の兵久ひそうふ勅又をもつ中
なるハ。今月十二日の午の刻ふ。高社の神殿めい
どうするやく久し。其後庭おるくすの木
凡ふうざうふ。中ふりとれくて神殿ふさとれく
ふ。されて枝志ぎく地ふさへ〻中ふらくるり
る。社種ハつくがなさとそそうしもちぬ。
家老を宮て。神殿の鳴動ハ山をもしかし。
うさがひなし。くすのさなら家里のとうへやうた
つよ。くすのきさとれバ誰ら君をおうぐしなるべ
き。まこうなりつくふ吉の表なりとさやさ
あるまなると。大塔の君も傍面ぬあへずやされ
なるハ。好事をなさふハ志りしとやるなるへハ。
まうしてけるまるなるべしとハやがて。俗神
山をつぎとなふハ天いまうごすてざるもの也。其人

八握髭の生長るまで哭ぎ悲びたまふ。
さて素戔嗚尊の曰はく、「汝が哭ぎ悲ぶこと此の如くなるは、蓋し以ふ所有りてか。」とのたまふ。
対へて曰さく、「我が児等を脚摩乳・手摩乳・奇稲田姫を、吾れ悉に八岐大蛇に喫はれぬ。
故、吾れ哭ぎ悲ぶ。」とまうす。
素戔嗚尊の曰はく、「汝が児等を喫はれぬる事、実に悲ぶべし。
然れども汝は是我が子なり。
既に此の国に来れり。
豈に妄に悪しき心を以て、我が児等を喫はれぬるか。
汝が所為、甚だ無道し。
故、汝を逐ふ。」とのたまふ。
乃ち十握剣を抜きて、一断に斬りたまふ。
猶し忿り不已して、遂に根国に逐ひやらふ。
一人の神有り。
名を稲田宮主須賀之八耳神と曰す。
是、脚摩乳・手摩乳の児なり。
乃ち稲田宮主須賀之八耳神を喚して、語りて曰はく、「汝が児等を喫はれぬる事、吾れ既に悲ぶ。
汝が為に、其の悪しき者を除かむ。
汝、宜く吾が言を聴きて、当に其の理を治すべし。
今、汝が女、奇稲田姫を以て、吾が妻に奉れ。」とのたまふ。
稲田宮主須賀之八耳神の曰さく、「恐し。
敬みて命に従ひまつらむ。
但し、吾が女、性、多に畏し。
亦、名を以ては、八岐大蛇、目は赤酸醤の如し。
一身に八頭八尾有り。
亦、身に蘿及び檜杉生ひたり。
其の長さ、谿八谷峡八尾に渉りて、其の腹を観れば、悉に常に血爛れたり。
是、汝が喫はむと欲ふ所なり。
吾が女、豈に免れむや。」とまうす。
素戔嗚尊の曰はく、「汝が女を我に奉らば、当に其の形を以て、即ち吾が妻と為すべし。
何ぞ強ちに畏ること有らむや。」とのたまふ。
対へて曰さく、「然らば則ち、吾が女を以て、立ちまさに湯津爪櫛と為して、尊の御髻に挿したまへ。
吾、当に八岐大蛇を以て、悉に其の酒を飲ましめむ。
当に其の理を治すべし。
宜く八塩折の酒を醸むべし。
亦、仮庵を造りて、八門を作り、門毎に八の仮屋を結ひ、仮屋毎に各一の酒槽を置きて、槽毎に各一の酒を盛りて待つべし。」とまうす。
是の時に、素戔嗚尊、乃ち奇稲田姫を以て、湯津爪櫛と為して、其の御髻に挿したまひて、八塩折の酒を以て、先づ八岐大蛇に飲ましむ。
時に、大蛇、頭毎に各一の酒槽に臨みて、酒を飲みて醉ひて、倶に臥して睡る。
素戔嗚尊、乃ち十握剣を抜きて、大蛇を斬りたまふ。
肥河、変りて血の河と為りて流る。
中の尾を斬りたまふに及りて、剣の刃、少し缺けぬ。
尾を裂きて看したまふに、一の剣有り。
名を天叢雲剣と曰す。
素戔嗚尊の曰はく、「此、是、神剣なり。
何ぞ敢へて私にせむ。」とのたまふ。
乃ち五世の孫、天之葺根神を遣して、以て天に上献らしめたまふ。
是、草薙剣なり。
初め、素戔嗚尊、熊成峯に到りまさむとして、居ます所の宮室を、出雲の清の地に建てたまふ。
乃ち、其の地に至りまして曰はく、「吾が心、清清し。」とのたまふ。
是の故に、其の地を号けて清と曰す。
遂に、須賀の地に到りまして、乃ち曰はく、「吾、此に来て、我が心須賀須賀し。」とのたまふ。
仍りて、其の地を号けて須賀と曰す。
乃ち、其の地に宮を作りまして居ます。
時に、素戔嗚尊、自ら歌ひたまふ。
其の歌に曰はく、

▲龍泉寺いくさの事

龍泉の城にハ相間くすのさぶあひかゝりけれども
ハやまとうりらのつかりのかよ人をこゝろ至てり
なるがうらせをあへてあるをとハをめんをせざり
もとるゝぐくてハらぶくに勢と至てを行るをん。
うち殺してこそ勝いくさにをめとて龍泉の
勢をばこゝなりけれども是なき勝体を百
人がりこをかふのうしとさぶらの事の積り
しこのゆこぐくしのゞまにぶくてこがりをゆひ
つまを行を大勢のこりりこゝ程を見をこりける。
はぐらの事をこまとこそあるとびこてし世分
をとさるこくなるらにぶしたる勢のこりりこゝ
んずるといふする見神をいへ素滅すべきりの
にあらばとぶくにいひをそれてをめんといふ人
ハ一人りすしぐらいこゝにくてこがりとるんとて
百五十人日ゐるにそりあり時大阪桔梗一揆の中
おぢとなまオ見えありけるを事ふつまうをん
の城をつゞくとはりのくりけるがそ龍泉
をうりていりくたるが豊屋の勢にその

明日よりとのぞひに龍泉をとぐるかざれハかるすぎ若
いつかつく偶人をつくまりしあるまりといふ。我
ぼこ日おちるづひて龍泉の城をこゝるに天中ふ
かりやしにかつるかしハかつくおぐるく事なるしい
る程こまハ大勢のこりりこゝ程をこせて鉄ぐる
つまをあくうしこに至てこゝりしおかゆりぞいざ
やんと他の勢をまくすじ一揆がり向て龍
泉ををめをとし。天下のせうぐんにそるへん
といひけれハ桔梗一揆の花の百よきこゝる勢べし
とぞ同じけるさしハやがて打立とて。関口月
廿九日のあかつき桔梗つきの百よきこゝのびゆう
にはぐらかりてまぐこゝのくめのあをりてねさ
つものまきれにつまうをんの一の事ハ是をしらせ。
同者に附をどうと活くるかそ川さうこの事
ゆゑとあり私意の事のりざまとハはぐらの役
ぬをなすべてあくりけるがつまうをんの時の
一事をゆゑておりやんにさきをかきこれぬるん。
こゝ城へ切くへんずる事ハ又一事のたるす
ぞ丈をこゝくまことのさきがきこゝハいふべきれ。

るふくしとけづくさしいそぎといふやどあそ
ぶきれさがしのちに春ゆかしよろひかそ
肩ふなぎとかけ居しるひがしさめてかうきん
の面の一の城をしらやぐらのるへ急ぎこゝりぶ
ふくるとふこゝりなし後ときゐとこゝれバあう
れがまの若ふ田ちぶんぶの心求の春ゆふ。
るゝ人春やらぶ二段つゞいたりをあしをみんれバ。
さうこのちの春須ゞもナこさがまをかりけいと
ずまれさこさふしいを来ゆこゝしこゝ
雪ふるのゆるとつゝそのがりかゝうとこゝ。
さがこのち自ひしるまくこゝりとをつゐて。
さりきしの春ふつゝこゝくぶんがきゐきよ
うちふをこゝしるをうふんのりられバあうれ
ゐ春城のゆへ入さこさがきゐのりぎ○あてゐ。
後の僧様よ立く給りはへとゞ忍くふ名案
て屏の上をあしこりをるこまとこて桔梗一き
の春ふ日春ぶち田ひやうごのすきを関海志ゆり
の兎こつのりきゞをりやぶつくこゝ入城の中
乃つゐりのれ志ゆしくさうへくてうひをるが敵の

太ぎいふ此方のぎ勢をとりこてかなりぎやゐ
ひをんぶ志づかふをさ矢いくぶ和坂とさゞて
とち行をる志ゆしくあまゐぶぢんくふあつま
すゐくる大勢たずりや桔梗一さが就ゐへよ
をて春ゐをるへゞしくやすくはよをあゆと
さゞ。楕の板志めを村をとちんこよくいくさハ
がすおこくこ勢すぐふナ万らさゞうちんの
ふりくへ井向ひさまバ城ハをやすてよをめれ
とされてやぐらいさでふ火をゐたり桔万の
ぐんぎいりしをかいくやすかしぬりのなぐれ
ゆどまて敵ゆ勢なるべしとゐしぞ大波ゆそ
川ふるゐをさせつきれぶらあしさよと弓をかま
ぬりのハなりけり

▲平石の城軍のる付和田新村のる

本川がさのちざる本六角判友入さう雲水やや
東山の内ゆうぐりん就山のいくさふあはぐりつる
事やすくぬりのうまと思ゆまくれバすぐと他の
勢をまゞへずして西方よさ同日のぐんをいふ平
いくの城へとしらすゐつ天ゆ村ちぶふるかど社われ

さらに是をうければ先ずるの人の指のさんとあ
まりかぶとの鋒とあしごまりにしく本尾さう
を本と切やぶりこゝろしとをもいくずすと矢
とをうりこゝ鋒を紀ゆくこゝ入るゝ事顔こ
らへずして。こゝ目の東まばりにかぶんがうしを指
てとらふかりこゝ下の城さやすくとゝされ
ゝばよをまはうつふのつく。鋒のあとゆるゞ
ごくふるり。和尚くすのさは氣とうしなて。
魚のどろふいさごくがおとし。うくのごとくなる
ばわる城の城をいく程うこゝふべき。暫時ふとあ
ととして後志やしやうといまどりまいしせ。こ
ゝのぶんぎととりまて。那へ入るし入をまい
らすべしと。諸人さるごろとさに思ひとなす。
すりや天下志ずまりて我家一とうの世ふるり
ぬとおもひぬ人はなりけり。鋒山ひらいくこ
ゝ下の城落しかば八尾の城をとらへずいまい
まづかふあり城の城ばかりよそのこりかれば城
さまぞのようがいたんくだくで和尚くすのさ
ぶからのあらりとてさふ居なくならられ

じとおいかふまへる城なまへば志ばしくもや
はさへなくてぢん。このよをまて一所にあつまつ
てぜ万ぎ五月ゝるのあらふあり城の城へと
よせ城の西ふ二千余町がるゝ一勢くり分
てぎつむりひ城とぞうまへうすのさはも
とより思ふ通ふうさふ似くゝ急よてきふ所さ
る様すくなしこの大てきふさうん事う
るひがうし。ぶらんがうきんへ引くれて。鋒の
勢のすくきゝとこそのちふさうんとゆ
ゝるとぞぐはいつもさうひとさにとしてゆ
ゝまことをまさぬりのなりかれば下べてしは終り
同ぞぐいくさのるしひまつるはつ日の事なり。
さうふべきをとさうけずして勇とつし
むとりつくらぢしにさて。色天下をてきふ
をさる。あ万のりのたがつゐふ神仏いくさゞ
つしつるすのとうしさよし。日本西の義士
たふまうはまん事こそ口おしかれ。紀相一和
うちして太刀の柄のこぢんおらざらるゝ切
ありんずるふでさあらきそ引ありぞきなば。

やがてかけふのつく討べしとぞ行ばんば又力なくこそ
時にそむかんがうちんのおくまでもいこりつく。
こゝかりんすれとて。和うちふるれさるつゝりの
三百人すぐりくどりぐさけしとおさへかゝや
くそくの名のりを定つゝ。和ふくふかどと
ぞ行こりける。又月八日の和なまば月は今日よ
つゝ入ふなり。時刻よくぬぬとて。三百人のつゝも
の丸一ぢんにすんで見しける。ゆふさがむかひ
城へ志のひ寄て。米ニ口ふして時とつくるを
こゝふをどろひてよそのぢんにはさけげも。
ゆふさがぢんはすこしもさはがずなりを取
めく行かをさう討ちはりとよりやぐらにあ
まば矢ぐらを引てさしつめくさんぐに行る。
うち物のこれはかはぞさるもふをへだてしが
まば切ておとし。鄰のまばつきとしごとを
ちんどくふをきざられ。和田いづこのもあさ
けぱろさにふ寄て切て入日ごろのことをと
まれずしてつゞかや人ことゝとめさてかはぐ
てきつくりやぶり一様ぞてと引そばめて城

のゆへとび入るまばおひ寄さがふつゝりの三百人
づゝて城へぞ也入るがふとの陣とよふけく。
よろひの袖をゆり合をくきりあつて天地を
うごかし出をちしにさがひまとめきさるんで
まぬけり切あひたるにゆふさがつゝりの三百
よ人おまりにさくかひ寄してすぞにけいろ
に見えたるにおそ川さがこの寄。五百よ
きにて敵のうちへまはり。清氏後坂とする
ぞ。むくなくしよりたるに力をえて。廉隆
十郎とこ沢ひやうごのすもを。蔵呂の勘解由
左衛門の尉三人にとゞまるくしてかひたるに和田
がつゝりの数十人うたれぞくばくきずをかふむつ
てがなりしとやらひたんぞ一方のかいぞてふこやぶ
けくぞ一方にがつと引こりたりおくにゆふさが
もとうこうに物新沢郎頭目とて。せにすぐれ
たるつゝりの四人ありけるてよりてきりし和
うちにのうしは。我に四人は敵の引をさんずるに
まゝぎれて。和坂の城へ和田くすのあにうち
がへて死するがしらずは城に火を寄てやき

とこれかと紹巣志さりかるがすこしもうが
ひずれてかつてきにまゝぎれて四人をにあわ
坂の城へぞのさりかるぞれ敷うちがうごうを
してかつる時立すぐり居すぐりといふなわり。
そこハやくそくの上意をおして諸人同時にり
さつと立さつと居がして敷のまゝぎれぬうる
とぞうりおさんさめのいかり半なりの和田がつハ
りのあり坂の城にかへりてのちの方よりさい松
といぐしぐぐんのさすぐり居すぐりとしかる
まゝぎれ四人のつハりのたあへてかやうれす
ふなまぬりのたなりかれバまぎれなくえり
いぎれて大勢の中にあこめられ四人をに討死
してぐんとしかるこそあはまなまこ天下一
のかうのりのとハこそとぞまことにいふべきこと。
かめぬ人にそなりかれ和田が敷うちにも敷
ぢん一所を出ずいかくしにあそれ見しかれ
バ此城にて敷とさしへん出ハかなりしとて和
田をしすのさをかんたにふたと敷の敷まぢう
りにあり坂の城に出をかをてぶんがうこの

わくへかにかり

▲吉野の山廟神異の事付法雲の軍勢京都に

かへる事

あ方の皇居はあんがう山の奥くりんしんちといふ
深山なまぶ居たるくてきのをづくべきかなれ
共仲侯の此殿に国にこのこ思しめされさるゆゑ
をんあり坂をもめとこされ又時がとこくひまぞ
味方をしつハりのたおかくれてきこかぬとこさ
こしかぶ山人相人あんない者としていく格ぐ
くのこまでもてきをめ入ぬとゆ御法しけ
まバ志のよりとりぐめまいしもそ女ぬんらう
后月のうんかくこれいかぐすぐさとおちとされ
さをおふさりかぐりるしよりふ二条の探定て
んがの候人にくるまるに上和面こうこの宮
ぐんかやうに利とうしるひ城とおとさるくてい
とこそ敷のこのこを付ぬされに妻子をとも
高の方へとくりつかし。我身を今ハりとぐり
切くいるるる山林にを世とのがれがやと思ひて。
まづ吉野邊まで出さりかるがさるにても多ね

さしくむりし見えりし神ゆくはありなぐ面
ゆは朱とさしくるがごとくまるなこのはかりかや
いくたるのさは銀けとさくるやさ　ふまるに
をひちがひさり　さ後ゆんさうの石のとがそ
をひくくをとしくれば　くるかふ見わぎくるふ
先帝こんまうの御衣をめされ　ゆうをんとぬ
ゆくたのはまふひつさけ　玉扉のよふ御寝し給ふ
はれすがことむりしのまうがんゆは聳ていられ
風ゆまかじゆさるさ海ふさけ　ゆりぎたるへま
うまそ　ぐやしやらをつのおとくこゆり　海こと
ふくるしぎるるはいさをつぎをはふくびこと
ふ　はによりかのかりつとりしあてくろをふり
こ　ふ立ようる　志げくくろそ志ゆ　やう後りと
すをとことをはおちくたれてさそ　と志をる
やまし　世をみぐる逆臣をとばれゆ　御つ
まそ　罰すべきこと勅りんあまばとしたすを
とことはすはすそふまゆいたゆうまうのおよ
て　御ぐるそ　詩をと　ぐられてはさそいつり
まえくるそ　先とあ　のくゆうことをそら

んと仕はる　義ちたの　敵そこさをとばまうさ　志げふ
中付てはへは　一夜目の　君ふはをつくしはりんず
らん　仁木右京の　大夫よしもとばさくち　命
忌　猶ふ中付てはへは　伊をの　西ふくそ　ゆろび
はりんずらん　ゆそ川さがこのち　清氏とばち　居
ゆ　能ふ中付てはへは　四国まゆうくのちゆろ
びはべし　東西の大しやうふてまりとそ　留
ふへさう　金沢とりのちをとばこと　夫ちんはう
をいの　大まりまう　新田左衛のすをとうしはさが
中　請はて　罰すべきこうし中はひつまばやすう
あべきふくはゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　同とをこうこのち二人は　夫ふくいやう
ふくはへ　龍の口ふ引すへて　我ふ　ふ　ゆ　ゆ
べしとこそ中はひつまてこそう　しやけまば
志ゆしやうまゆこふはゆよぎをふうちえまを給
ひくさしばゆ　男のうりぬさこふくくくい
らをとと作らまてはべうの中へ　ゆをはひぬと
まいうをそゆめはさらまちさめふりと　山西

おぼえんにまじはりて吉野(よしの)へまゐらんと思ひ
御(お)まうけつかまつりけれども、いまだ
まさに只今の御世のありさま申さんとて、とくに
某(それがし)人をまゐらせ、よき御返事をまちけるに
たんぽうのさたにおよばずとて、ただ
とし頃のおもむきを申して、方(かた)をとりなして、さ
うらはんとぞ申しける。御仏念(ぶつねん)ちがひありて
はなはだきこえぬことなりとて、さしおかれて当
しかるべき御事にて、当方の退治いまだなかりけり
されば同(おなじ)く月十八日、主の御こころざしにて上洛(らく)
しけるを、仁木(につき)殿、細川清氏(きようじ)
まつりごとを執(と)り、ひとへに天下をしづめ
つのりて凶徒(けうと)を下して、兵衛佐(ひやうゑのすけ)の二方(かた)ぞ
まさしく、都へ上洛(らく)して、どのくに在(あり)へぞしらず
ありとぞきこえし。南(みなみ)の方(かた)よりも仁木をかたむけ
やがて思ひ定(さだ)められて、いかさま仁木、細川
ともにおもひうらみ、御(み)かたにかへらんと義(ぎ)
をとげ、ひとへに天下のまつりごとをぞ
ねがひける

太平記巻第卅四終

太平記巻第三十五

起延文五年五月
尽同年七月

▲卯丁 新将軍帰洛事付仁木義長を討んと擬する事

さても去程に南方の敵退治して、義詮帰洛ありしかば、京中しづまり、主上も叡感ありて勅使を下さる。然るに畠山・細川ら仲悪しく、土岐・佐々木・吉良・石塔ら、仁木義長が驕りを悪みて討べきよし内談せし事あり

▲三丁メ 京勢重て南方発向事付仁木没落事

さても去程に和田・楠又出張しける由きこえければ、義詮朝臣、畠山・土岐・佐々木以下の大名をさしむけらる。仁木は天下を覆さんとする志ありとて、諸将をうたがひ、実にはひそかに南方へ心をかよはしけるとぞ。仁木右京大夫義長は一方の大将にて、諸大名の中にて驕りを極め、将軍を軽しめける故、諸人これをにくみて討べき由、一味して兵をあつめければ、仁木は都をおちて伊勢の国へぞ落行ける

▲八丁メ 南方蜂起の事付畠山関東下向の事

さても去程に南方の敵又蜂起して、天下の乱れ止む事なし。楠・和田らの兵、河内・紀伊の間に城郭をかまへ、畠山入道道誓は関東へ下向して、武蔵の国に蟄居す

[illegible]

九十五

▲小野の通和尚の事 付 [illegible]

[illegible]

九十六

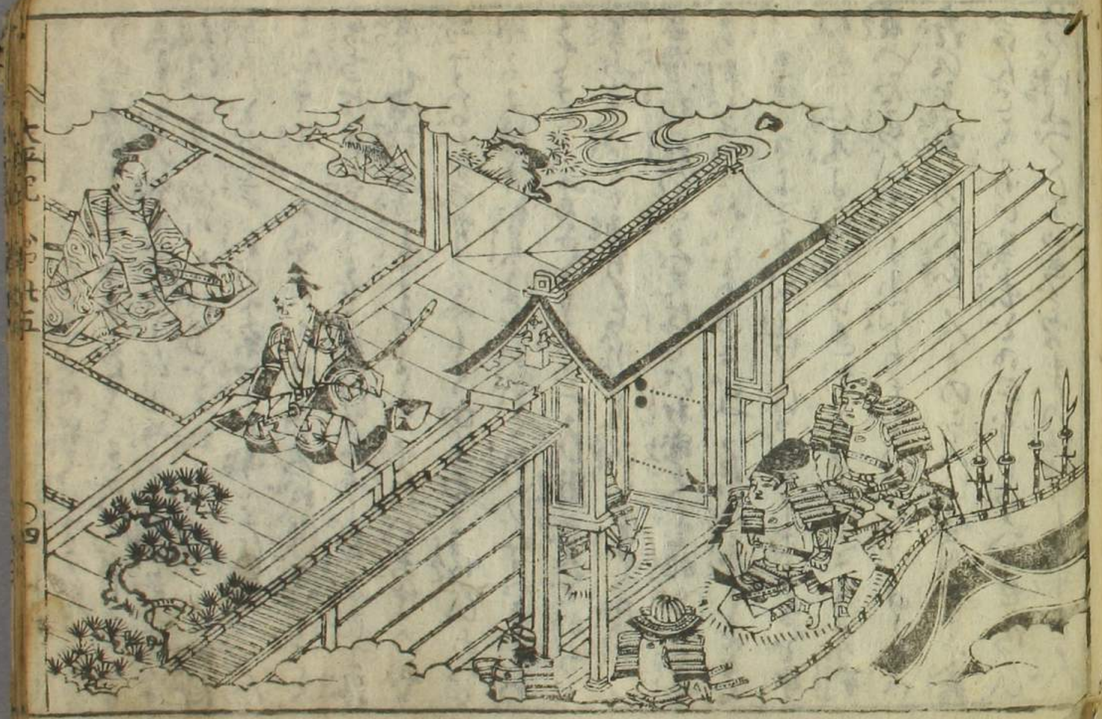
▲尾張小河東池田事

[illegible]

太平記巻第三十五

▲[illegible]軍[illegible]の事 付 仁木義長を討んと擬する事

[illegible]



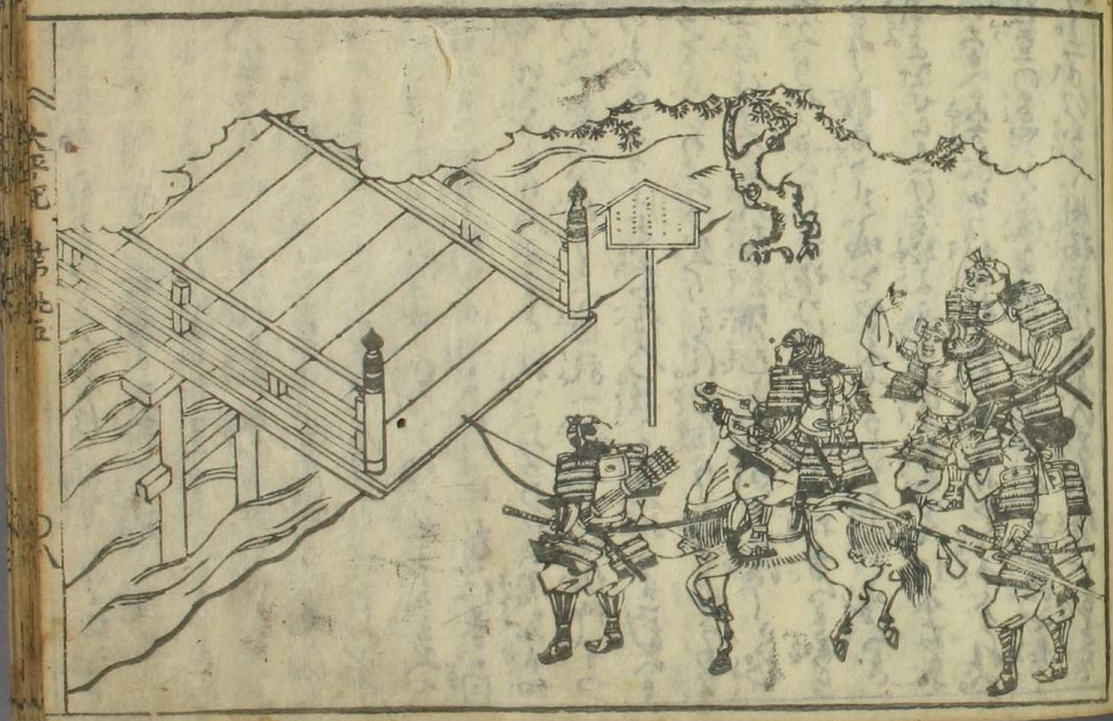
千六百余騎、和様の戰勢ロ千よきこゑをあはせ
ぬ。義長ゑ名かを坂ゑしく。わたれ勢やこの勢七千
よきハ天とうるの勢十万騎にも同うるべし。あはれ
ばゆかをして。敵と侍んとて。松子中務のお物粉反
よ二千よきを付く。四条大夫よひへさせ。金井沼正
乃お弼よ。一千よきを付く。高橋の亀ゑ孫をとらせ。わが
弟ハすぐにもうる兵たれをして。宿所の四方四六町程の
高橋を焼きたひ。高のかけ場を底くかまへ。ぞくぞくぞく
の中に立ねたら。さ勢ひ事がら。ぞくもよせ給ふ事
大勢なりたび勢ひよ二度三度ハ何様急ちうされんと
ぞ思ふらけり。宰相中将ゑ、諸人のやむひに付く。
細川畠山よ内海の事をかゝが和様の兵なか様二人
と仕りつべく見ゆるハ中将ゑと見こゑ居るを勢の大
たとあらふく寄べりとはして。中務のお物とたぐ
し。様よへまハ義長二百よきにて。中将ゑ四至形へ
乗し。四方の門を警固して。門をくに内和様の人をを
づまに。毎の已が所なりまくに中務ひきれば大きう高
下向の軍勢たハ。忽ちよ鉄欲の名を聞く。遠方の後
旨の数寸となされ義長ハ武家様。

[illegible]

▲南方城攻の事 付留山實東下向の事

[illegible]

[illegible]



[illegible]

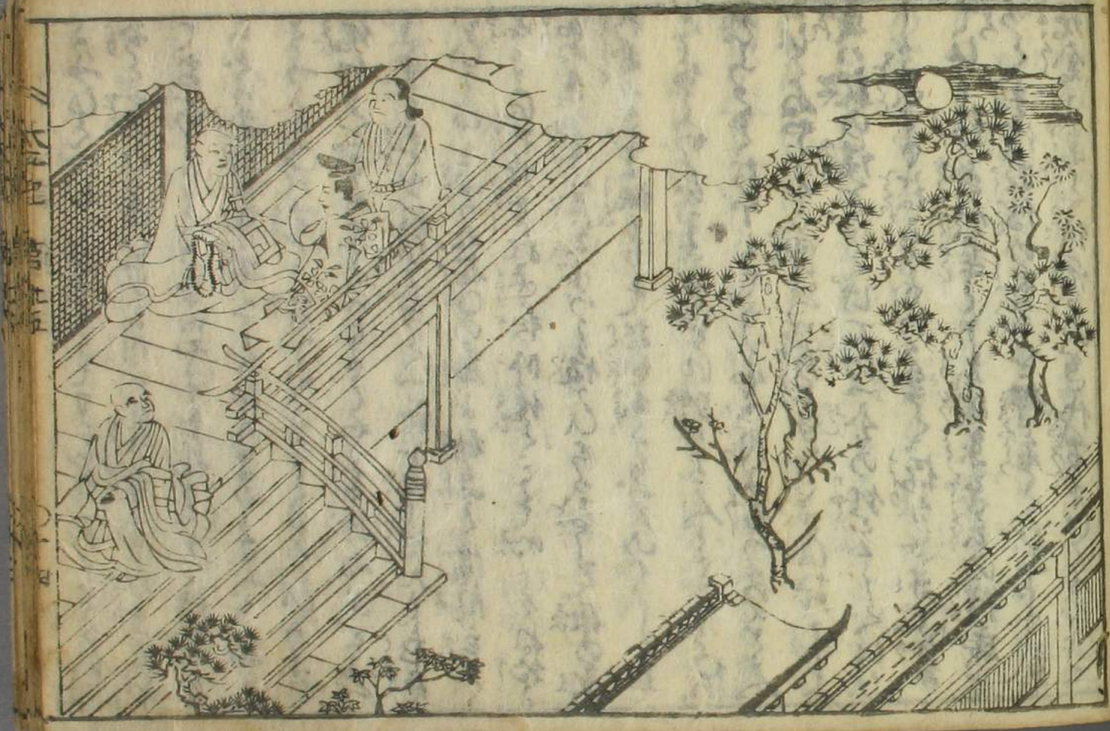
[illegible]

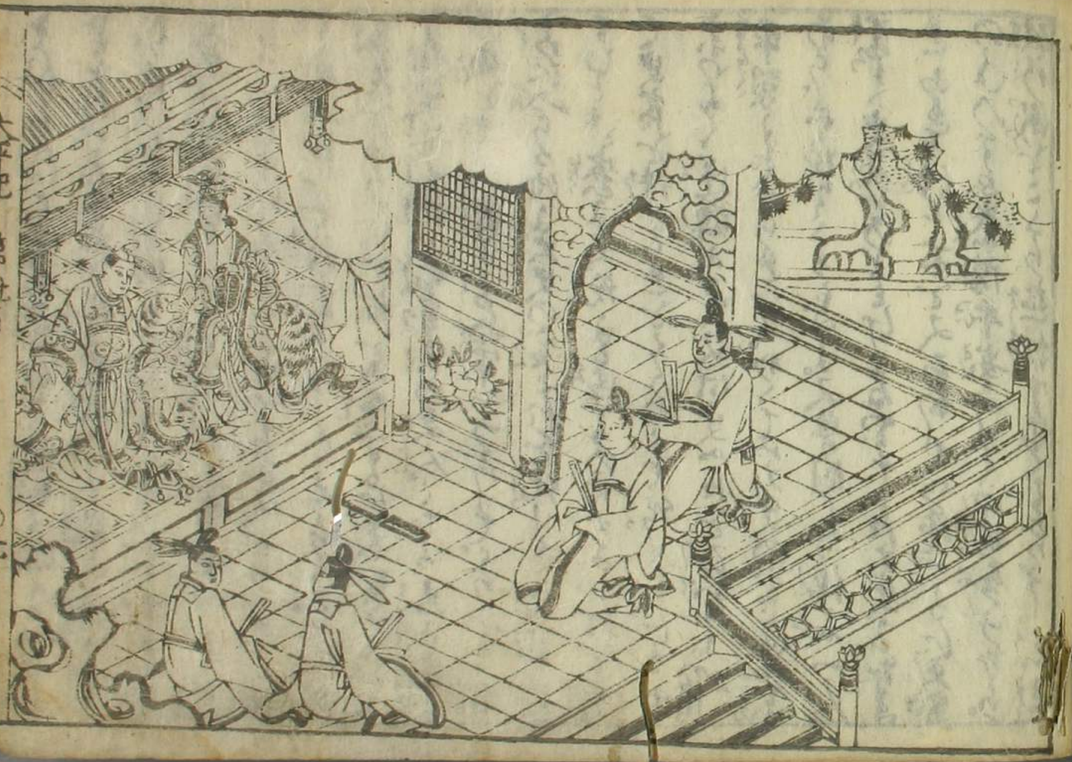
[illegible]

[illegible]

たがりまた人の地をして。採れすはあらうまると。今程
の人の如くはまてたりがりまた人の地をば。採されたる親
物を人にゆるすまぐらぐ。その比他国より訴訟のあ
る。此国の国をもゆるさるべし。此国花と石の色すくみく。
我欲のあるまとすを聞く。彼よりかつりまるとされば此文
主わが国を治るのことなり。他国まぐ国をかどこにも。
只此一人の無欲ようくなり。剰此法みちく。天下
を一統してたり。百姓の職を持き。大きな一人小欲にも
結ぐ。天下をかく治べしとの結ひまれば。泰時ふく
行べて。よろし時給名の執事して。譲状のあらし時。
つゝくらし時の国をもつよ。我よりも弟とが経也
せらましかば。父の世まれ如のこまでもちとせ度もひ
結ひて。譲とがこれはざるんと推量しく。弟のこ
も時しけ時以下にむ〇この不領を与へく。やす時は三
回義め人家子の分限がとくなくちとまされんと
まぐはいさくかなるすなし。如此よろ川小欲に
ふるまふゆかや。天下日に随く治ると。諸国にしを
通く豊なりき。此大きの前に訴訟の人来まれば。
治ぐと友人の教をまくはらく。やす時天下の政

を賛ぜ川さ人の国に野曲なきことを恐ずしらまれば
唐国の中に諸なし。一方は宮て野曲なるべし。何乃
日本方法文を持く来るべし。野蛮の人におおくれ。
忽に罷国に下行ぶべし。野蛮のもの。一人国にあまぐ
方人の論ひとなり。天下の欲なかすり是に志
んとて論り結ぶべしとて立まるり此種をみるに
解あらば。やぐくはるる国にも会せらるべきとく。名
をうく侍本方法合しく。或は和談し或は解乃方
は私にまけく。強和を言論しける。凡無欲なる人
とは賞し。よくあるまるとは和しあ結ひしが。人の和
を採ちんとする者はなりきまさしきれば完義えれば
天下訓諭の付備手をもくのへ判形をくらべて。富祐の
私の来を備ふ。やす時法を来れなるは来ゆせ立るを
ちば。其地斗をかりうに無理すべし。利分は我をへく
無すべしと宮らまて。而くの性をもりとうきをると。
和欲をも持ちる人にも結来のなれを無させ。我方
より利分をそへ住す無しきまれなり。賞なる者よ
はうなゆるして。我親国の業にくぞ。主ふは性よりへ
されなる。さあう乃至は山中に無す結論を行ひて。





まづかゝのびとき君さ。猶よ天下の人とやもろ
らしかんとおもはれ。臣さ私なくこの姫といふあ
や人わかれ。これがよくひとうる武家の世と。文
方よひろふくちくさらんやうかくよやうに世を
ちりえば。三千餘国まで蜀山の君の国に。堤
き家の社さく君をしらぬやうにくれくしまれ
と此く。あるものの時をとがおもひやらせ給へとつ
まるべきとせずかゝらけるあ人物だけよも
と安藤で再とすまれ知らぬ。これは内典を
その道にしてあらんとおもふ法師。つくづく
とおく。性なと押のきやうこゝ乃金珠法
ぐらくやけるはつらく天下の乱とあんどろ
よ。古家の内科とも武家の僻とかやかくし。
そこで因果の感ずる事とこそなりへ。其原
仏よ家法ありしやせば。仰でそれは信をうし
でひべき。仏説の速こゝろをもろに。嫉一所こ
ん僧よ。菅王宣よ波斯の匿王とやけるの小国
の王。淨飯王の聟よなるんと語。淨飯王の母よ
はきらはくおもはなく。辞するにおとどめ

ことをん。名つゝれ名ゝ夫人の中に。鶴形とくよ。あひ
く勝うると信でこれを弟子の姫と名付給ひて。
波斯の匿王乃后にもなされ名。やがて此后の孫に
一人の王子を出せ給ふ。是を瑠璃太子とぞやけ。
七歳よりさせ給ひ名ゝ。淨飯王の城へおくしせあ
そこれ名ゝが淨飯王の母なし。屋まぞ発し給ひ名
ける。親氏の孫子大名元とくて。瑠璃太子は。是ま
おくの山縁にはかゝりなかへよ。大名元と同位に
ゝ。ゝべきとて。別王の屋の上ありとひやうしまる。
瑠璃太子とこゝ。やすくざるかるに。北
がしゝされ名ゝ。親氏とかゝ。親氏とか
ろがして。此面とすぐべしせ。あらく無念とも思
されなる。さて二千余国を給へ。瑠璃太子は。
淨飯王は崩御なしかば。瑠璃太子三百万歳
の勢を率ゝて摩竭淨土の城へすせ給ふ。摩竭
淨土とは。ちゝ土をかりとつゐしとも。ふくうの事
なりまだ。つくものはまぐ。あくまりさせまゐ
で。王ゝ心をそこにせあをとさるべく。そしけるや
よ。親氏の新利縁よ。つよ弓先数百人へ。さくす

町子町と称うしけるぞ。
えびのようの門とてそこく
ゐしやう。かくれやう。雑色八はし
ゐしけり。雑色の新利根八。
つくんと雑さとてさし。
やと称うも。人は称わうつ
よもこそをしけり。
今の捕ともうし。
うもくゐもふく雑色
おおくうしの物とつくり。
をうそれぐ個のまえ
き。雑色の新利根
んうしは何。
て雑色。
うふあ。
くゐ。
をけ称

まゐがてうでうすひ
まうつこそ。
まと源義
の神の明は
とうまこけう。
たうこの
て同連称
くうう。
すくうんう。
事をたん。
主殿地
らあ
つ
り

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

太平記巻第三十五終

太平記巻第三十六目録

起康安元年六月
盡同年十一月

▲仁木京兆南方へ案事付太神宮御遷宮ノ事

[illegible]

▲大地震并夏雪ノ事

[illegible]

▲天王寺造宮ノ事付京都御祈禱ノ事

[illegible]

八丁

▲山名伊豆守英化の城を落とす付菊池軍ハ事

此中文ハ山名時氏英化へ發向して城を責落しけ
るに赤松範向ゆれ其ゆ但馬より敵起りけるに赤
松進退ゆ繰しけるを見て九州より菊池と大友
少貳と戰けるが菊池が小勢に少貳大友ゆ
及ばるゝ事を記せり

十一丁

▲秀詮兄弟討死の事

此中文ハ赤松光範が新地拵ゆ玉の雪の雲鐵を作と
木の巻繰して石放され佐々木に入りけれハ和田楠ゆて
佐々木秀詮と戰しが秀詮討死したりしを見たり

十二丁

▲清氏叛逆の事付和橋の子息元服ハ事

此中文ハ細川清氏と佐々木の巻と閑に恐を含で終に
清氏敵に加ふるを見て八幡八ヶ月と名付けるに孫子も不存に遂
せ八幡六ヶ八幡八ヶと名付けるに孫子も不存に遂
ひ出るなり事ハ此社に清氏の逆の相出あるによつて
事ゆ殺れ清氏の狭へ下りしを明せり

十九丁

▲領宮心替の事付畠山道誓がよす

此中文ハ清氏の狭の敵を取りて畠山が城に居よりし
此討ちを向られけるによつて清氏向て傍がれ
に城に帰りし敵を係に入替りしてなれハ清氏
討死ゆ城に入りしを見て畠山道誓ゆ伊豆の狭の
里を背義源徳源ゆて統領の狭の狭と一味して敵に
加ふるを戦ふり

大平記 第三十六

▲仁木京兆南方へ事付太神宮内流宮ハ事

此中文ハ仁木の天竺畠山殿の狭の狭の
におこつて死骸路徑に充満をし半そくおこ
わ次に狭の狭元あるべしとて延文六年三月廿日
に康安に改らるゝ事を聞ゆ京兆の狭の狭
て四方八十六町まで燒失とて改元の始に後中
うやうに燒めり事ゆ事ゆ事の表ゆ也ゆ事
うるへうくしやさるく人多かりけれども武家すぐ
に宮下せと取りて西へ行ゆ事ゆ
又改元わしん案を傳なしとて終に
もちいらるゝ事ゆ仁木京の大事ゆ
三年ゆ大歌に和まれていを乃長神の城に
里ゆ知行の地を多く長類とかしく
ゆつて粉切さる一ぞく御沒潮に
まづかに三百ゆ城にかゝる
光邦山今峯兄弟三人にしめハ仁木に
ゆ城に去りしかるゝ弟の邦山今
忽ちり難くらせ見ゆ兄の

すりふさしく執義と偽て私の本意を遂ぶ。
とは世侍ふつまとまりすりたる天下とは拝まりたふす
なるさきのなとしの中ふさしりさまとめ也いまうる
仁木右衛門の大夫義長大勢ふうこまれたるが如し
がこさふ世方よと東中をやとしたる評定し給ふとて
ふしねがまゝ東山のふるまひ思ふして流くる
ずしいつさまるしいさうもふに逆る時は稱なさ
人と殺しておやまれりたる思ひず氣よ合時は
ゆるなさふ義とおもへて思ふこまとも返ふ
まゝの義思とおもまて義詮朝臣なるまくさ
かくの若なまは宮の御さめふ思ふ者と存べさ
やせ子の義能と稱わさこゝ宮の御ひし程のふ
なまは世方のみ子の三ケ国の悪業をさ宮へ
しらべきやりしかまゝ不存のごとく悪業をお
こなはまは日本・右中・右ケ国よ一所ものこる所なさ
べしいふ四郎の友軍をいつまの所なる男とし、
なさ信こまとも思ふ者ふ者ふ者ふ者ふ者
ず給ふまてられ来るを人宮ふをひて自滅
をんしする悪人と世方ふなされしは豊の宮の

とすまとなしんやさゞ虎をおひてこゝろ楚と
まゝく風情なるべきものとしやられはゞ
ふ仁木を引ちゆしと見しくてやらるは人
悪きまハさる事なまとも又ゝ人ゝはおゞし
ず隠念ふくは寵り景の八幡を来てちごと
切殺して神殿ふ血をそゝきやりこまてハ鞠の
神人を殺害してそくりの神祇を負奴約
きの人ふくこれなどの悪行をしるまゝ
くも安穏なるやはべき仙興もまの五百人と
殺し擬足なる一子の宮を害をしもうる擬者
の不変としてあまこれも直人を見直してや
ふ悪ず人の誇りつゝしまの毎ふ愛ではなりふ
てはなりぞ又は人伴勢のふを愛能して三悪し
くりしふおこ又ふ公家ふ家ふとさゝる神こ
敵ふおゝ太神宮の御能と相能すこ御て祭る神
皮ふ家敵ふよてお家ふ奏安し武器ふふまと
祈ふ宮殿うりこのさ来ゝ御ふまやあらして殿
家の編名御敬出となされしをとも義長ろ
て西門とは剥へ神と祈祈しつゝがふくさして。

[illegible]

▲大地震　并夏雪の事

同年の六月十八日の巳の刻から同十月に至る迄。
大地とびたてしく動く日に相ふ時すし。
[illegible]

[illegible]

[illegible]

被の頭のびやうと申て面まハ巴とまゝ蓋なり
八諸と呼ばれるが頭まゝあらはれたるが人
見と怖てちりつゞみず。二ヒるを押て後ぞきわ
さりの浦人先程百人集りてゝろ小貫ハ右ゝ面
とばの半の後ゝくぞ入てゝりたる鶴ゝこのぐら
ゝくがさゝ呼ばしとそ大きなる瘡出を抜て大
がゝとつゝやうに掃さりたるゝ大こゝ天ふひゞき
地と動りて。二時ばかりぞ呼さりたる山崩て雲にこ
ゝ鳴ゝいて天に飛つゝかれば百人の浦人ども
只今大地の座へ引へらるゝ心ちして行況もまゝそ
なず偏面をよく見るをなく宮角分へそ上げ
ちりたるゝ後ゝ人なりたれば天よ
やよりたん又海中へ入たん鳴はすのごとく海て大
こゝ見んしずゝ入たるゝ又八月廿四日の大地震ふ
わく海風はもしく吹て屋宅をたりしく揺れ
見しなるが新波の浦の沖より大砲二ツとひ出て
天王寺の重畳の中へ入と見しなるが雲にはすふ
ぶゝ矢鳴ゝ見こそ成の光宮ふひゝめさそ大
地に宮大し鶴ふ神ふぞ見しなりたる三の鶴ゝ

御又大地鳴しく動て重畳微塵ゝ
なりたれば天ハ白ゝ横ぎさは鳴ず。これハ
横石ゝ法太子は安宝の紀を利し量ふ
まをバ。龍王見とおもしんとすると紀は後
の四天王おしまを活ひたるゝ海中
ゝ山ハ鳴り鳴ゝ地の九揚りなく能時無治。
ハ地の鳴れぬ不をなりたり四紀の鶴ゝ不完
ゝり以来ゝ雲ゝやしぎ見れば山ゝ
なる世の鳴や知ゝあらんずしんと怖とそれぬ人
いさしふかし

▲天王寺の重畳の事

高宮ハ大地の座ふ法王寺の大がらんたの破
ゝる神を出ふ天王寺の重畳がどうつまこゝ
畳令ハなく紀利の山ゝ聖ゝ地もなれ
ば此の鶴ゝ小ハおしゞと法王寺の法
祇ゝと始らる刑殺あるの魯海上人勅と申
て。天王寺の重畳と他らまゝなるふ是代のさ
どくたゝ多りたりまつ大慶ゝ畳の揚なれば。
無蔵云田治紀の堂のなまひらり天王寺とおんず

▲勇士義死する事并紀の事

同九月廿八日河内の国より早馬を立て。
京勢そく〳〵討ち上るよし申しければ。
錦の御旗二流。菊水の旗二流。二の足銀作の鞍置いて。
其の後嫡子左近将監正成。舎弟七郎正季。
すでに打ち立たんとしける相中より。
の勢と並べて。西坂本と見らるゝ所に。
浴せ懸け〳〵。東へ〳〵と追ひ立てられ。
ひて〳〵ども。ここにて接戦の思ひ切りと見ひろめ。
手あやまりせんと。各〻馬武者の。
らまれんばかりと合こ。
ち腹切らんと。

▲楠兄弟河内より上洛し湊川にて討死の事

兼ねて期したる事なれば。
べきとも。あわて騒ぐ気色もなく。
ず勧すもでわ和田の湊川の西の
としするを。
後世のふ聞を。
め。南無あら無念や。
いまだ二十六歳とぞ。
らず。
のこりて。
やがて
ず。

田稲あり屋うらくと笑ひて敵の
後とハ家にて見さ手ぶし同じくハ楠とも河を
解させて打殺をしていと事まことを知ての
建くとしてそのうちなる和田楠元とこゝ見ま
して源より西へ下るを四方人をして南方の敵ハ
西より寄られぬぞ神崎の橋ぞめとさしへさを見
へとぞ呼りをなる佐々木判官元と申て敵叔
ハ藉まて流より寄なり。敵て返して戦へして
南方源田なる所一と一面に打重てりの橋つめ
へとぞ面所に成してあやまきと行下ま楠が足
がるの野伏三百人南方の源田へ立後て矢尾とき
けへさんぐに打る南方ハ源田にてこの足もこ
ず流より返して底にて戦へし先河の勢
に割をられて後河より返さんとする所ま和田楠
橋りく楠塚の百よりこ後つまて退り付ふり中つ川
の橋流にて白江の源田にてさき路とぐまつてうら
死しなるぞ安東門者なるまでハ足の立の長恵とも
まこまへて一年をせんずると佐々木が高てより抜
ぬ人の中。四橋の百よりこゝうりひと戦ひ手

而ながら太刀なきなどを持て河中へ入る所を見つる。
路ハさしも武勢しつる吉田ひとんとも先に橋を渡
和ひるがけく敵を渡さじしやたくりかん橋
板一ろ川落てなれバ流に流る川方の六百
よりこハ皆ハ不溺まてぞ流まなる佐々木判
官兄弟ハ橋の急まて落のひとりなるが源二
郎が橋の落てはぞとても叶ぬ事也返して
付死をせ給へ田代かうんとらひろに和しめれ
て兄弟二後川へして矢尾に討まてなり此生
沼郎左衛門子兄弟二人も判官の付死するとも
て一所に打ちんとしなるがうるの平頭付れ
こゝ田の落さまなれバ田の畔の上に二人立る
らんで敵ならバ打らぬて死るんとしなるが。
壹矢にこゝな時すくめられて一所にて皆討まれ
なる時がうりの軍に死する高勢二百七十二人。
八門敵に討まて死する云僧に四十六人に至
ず。まかに二百六十二人ハ皆川に流まてかゝ矢よ
なる楠の組の仁恵とつゞき情わる者なりなれ
バ。わるひハ野伏たに生れまて面鳴をしれる歌

とも切ずあるひハ河より川よりれうひるさ余
せしうる歌とも拂ゆとうず。其保なるものまハ
小神とまゐせる者やうりのふハ事とあまやく。
事へで御しつりけり。身の軀ハ忠しらるれ
ず。鷲ゆめりのハなりうりり
▲清氏女達の事付相撲せる事見え狐の事
元男としそすりや大鳥の君のまつりに事との丸
出来ぬりたとあるさ中のそれに京都に希代ぬる
みそ。行宮の挽す細川相撲のせ清氏も弟たる
その他相手紀本中務のお捕二人ハ其に勢と為
て武家の怨歌とあふるり事の抵元とあるまゞ。
佐々木佐渡の判官入道ぞしよく細川相撲のせ清
氏と申し仇をふくせ事みそしに先ゆ君
は打狐の心とあふしそ中のとし先ゆ君の事の
志せ獵ハ家撰の女達氏のりじゆうりなくふい
しうるに一夜も変ずるなふして志うを君戦地
に美ふ此級くしうしぐらふうへく恐捕列祖に
後をしと家撰の女死をもし刺そうしまくこ細
利しうして君を屋洪左衛門の佐と知れ

事の志せ獵とまゐしくんとれ細川相撲
せるこれと申てさうしまやみそへさして家撰の女
が子とれ立て別も得安徳の出家とこそ申
なるそれにかくハ君をが賢情とし一也つぎに侍
の後宮の居ハ御方の見れ君を厨ゆ所なり
と御方が宮中侍の刺客相伴御元とも申
後御方ハ行を川が宮中居して君をしうば細川
そと見聞して安徳の出家とも申ふ
別祖ハ君をが聖也それハ事と押へられ裁と
さへらまて御方を君にて見ゆ清氏賢情
のまゝなるが沢ふ御の事の後嗣とハ君をいハ
まゐるゝ申て婦孫とこの判官秀俊ふりこせ
うりなるとお程のもあるまゐ松大夫くらうん先
能に安徳をさせんも時に秀見と敵ずるを源
るそ申すしそれにかくも君をが賢情を二也沢ふ
と夜ゆ女の相撲の事相撲のちが館へおりしく
ち百姓のこう会としてあつさるりと事を伝
らまゐれバうゝのも後に無しとひて相撲の
事始とうしうへ所よりしそ相撲人と後川にまふ

[illegible]

敬白　吐祇尼天寶前

一清氏夏辰日海子孫永可誇業花半

一主相中将義詮朝臣忽受病患不被死去半

一左弘基氏英氏威背人皇一被降我寓半

右此三ヶ条之所祝一ヶ今如此者永為此

[illegible]

康安元年九月三日　相模守清氏

[illegible]

[illegible]

太平記卅六終